第四講

40分

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

「他者」をめぐる以下の考察は、徹頭徹尾デカルト的観点からなされる。

しかし、デカルト的観点とは何か。ここであらかじめ、一つの誤解を正しておきたい。それは、方法的懐疑の結果デカルトが発見した「私」の存在を「近代的自我」なるものの発見に重ね合わせてしまう見解である。これはまったく間違っている。そのようなことを語る「哲学者」がいたとすれば、彼の「哲学」はいっさい信用できない、と言えるほどである。そして、もしかりにこの文脈で「近代」ということについて語ることに意味があるとすれば、デカルト的な「私」は、明らかに近代を「超える」ものであるといわなければならない。なぜならば、近代的であるとは、いっさいの唯一性を否定し、すべてを同等なるものの複数性において語ろうとする志向をもつことであるのに対して、ここでデカルト的であるとは、本質的に隣人(同等なるもの)をもちえない唯一なるものとしてのこの私の存在にどこまでも固執することを意味するからである。近代とは、ひとことで言え

ば、A等質空間の捏造（ねつぞう）の時代であり、デカルト的であることは、まさにその等質性こそを疑うことなのである。

自分と他人は違う。自分のことはよくわかるが、他人のことはよくわからない。いま自分が何を考え、何を感じているか、それは手に取るようによくわかる。しかし、いま他人が何を考え、何を感じているか、これは手に取るようにはわからない。この自他の非対称性は、誰もが知っている事実である。

通常「他者の問題」といわれているものにはいくつかの種類があるが、そのどれを取っても、もとにあるのはこの事実であってそれ以外ではありえない。しかし、この事実をどのようにとらえるか、そのどこに「問題」を発見するかによって、「他者の問題」は多様な相貌をみせるのである。それはまた、他者の他者性をどこに見いだすか、ということでもある。

まず、他人が何を考えているかわからない、という点を取り上げてみよう。今、路上でたまたま見かけた友人が、何かを必死で考えている様子である。何を考えているのか、微に入り細をうがって彼を外から観察して見ても、言い当てることはまず絶対に不可能であろう。彼は道に迷って微（かす）かな記憶の痕跡を必死に辿（たど）っているのかもしれないし、何らかの必要から三桁のかけ算を頭の中で必死になってやっているのかも知れない。彼が何を

考えているのか、どうすればわかるだろうか。彼に聞いてみればいい。だが、聞いてみるしかない。彼の答えが「暗算をしていた」であれば、疑問は氷解するだろう。なお残るわからなさは、なぜ彼は暗算などをしていたのか、という点だけであろう。そこで「なぜそんなことをしているんだい？」と聞いてみる。もし彼の答えが「路上で暗算をすると心が晴れる」だったとすれば、B今度のわからなさは最初のそれとは異質である。そして、そのわからなさがどこまで問答を続けても晴れないとき、そこに「他者の問題」がある仕方で登場してくることになる。このような場合に問題となる他者の他者性を、かりに「理由の他者性」と呼ぶことにしよう。

　理由の他者性について論じるべきことがらは多い。それは結局のところ人間の行為全般におよぶからである。およそ人間が自らおこなう行為のすべては、行為というものの本質上、その人の考えることによって導かれており、人の考えることは、考えるということの本質上、理由の連鎖によって成り立っているからである。ところが、ある人にとってもっともな理由は他の人にとっては納得のいかない理由である。納得のいかない理由によってなされた行為は不可解な行為であり、しばしばそのような行為をおこなう人物は不可解な（訳のわからない）人物である。要するに、ここで問題になっているのは人間の従う規範なのであって、異なる規範に従う者

が、すなわち他者なのである。C<u>したがって、すべての人間があらゆる点で同一の規範に従うとすれば、この意味での他者は存在しないことになる。</u>

　次に、他人が何を感じているかわからない、という点について考えてみよう。今、路上で見知らぬ老女がつまずいて倒れ、膝がしらを擦りむいて痛そうにしている、とする。彼女が何を感じているのかは、一見して明らかであろう。もちろん、痛みを感じているのである。ひょっとしたらかゆみを感じているのかもしれないと思って彼女に質問してみる、というのは常軌を逸している。しかし、他人の感じていることはわからないのだから、彼女がそのとき膝がしらに痛み以外の感覚をもった可能性が皆無であるとは断言できない。そこで彼女に聞いてみる。彼女が「痛い」と答えたならば、この上はもはやいかなる疑問も残らないだろう。彼女はやはり痛みを感じていたのである。

　ここで重要なことは、なぜ彼女は痛みを感じていたのか、という疑問は残りえない、という点である。それは、目の前で彼女がころぶところを見ていたからなのではない。たとえ彼女の膝がしらの痛みがなんの脈絡もなしに突然現れたものであったとしても、したがってその痛みがなぜ起こったのか外から眺めていただけでは決してわからなかったとしても、なぜその痛みが起こったのか決定できるのは、彼女を外から観察する医者であっ

て、彼女自身ではない。痛みは、彼女に起こる出来事であって、彼女がおこなう行為ではないからである。起こる出来事にとって、問題なのは原因であって理由ではない。[D]それゆえ、「理由の他者性」はここでは問題になりえないのである。

それならば、ここで問題となりうるのはいかなる他者性であろうか。それは彼女が感じているものそのものの他者性である。これを「感覚の他者性」と呼ぶことにしよう。感覚の他者性という「問題」は、理由の他者性という問題にくらべて遥かに技巧的な「問題」であるといえる。それはおそらく哲学者によって作られた問題なのであって、普通の人が日常生活の中でふとそのような問題を感じる、ということはまず考えられない。問題を作り出した哲学者は、大略次のようなことを主張する。われわれは誰も他人の感覚を感じることができない。他人の痛みを痛んだことのある人は誰もいないのだから、他人の痛みがいかなるものであるのか、誰も知ってはいない。「痛み」とはそもそも「私の痛み」を意味する言葉なのであって、「他人の痛み」が何を意味しているのかは、誰にもわからないのである。それにもかかわらず、通常われわれはその種の言葉を問題なく使っている。それはどうしてなのか。

つまり、ここでは問題のなさが問題なのである。本来問題を感じて然る

べきところで誰も問題を感じていない、ということが問題だというわけである。一見したところでは、この「感覚の他者性」という問題は、思考や意図や期待を含めたすべての心理現象について妥当する問題であるかのように見える。誰も他人の思考や意図や期待を体験したことはないからである。しかし、[E]そうではない。思考や意図や期待には、理由の他者性はあっても感覚の他者性はないのだ。なぜならば、ある人が感覚しているとき体験していることは感覚の本質をなすのに対し、思考（意図・期待）しているときに体験していること（感じていること）は、思考（意図・期待）の本質とは無関係だからである。68＋57を考えているとき、その人がどのような心的体験を持っていようとも、それはこの計算の本質とは関係がない。そこにもし他者性があるとすれば、それは、この計算をいかなる規範に従っておこなっているかという「規範の他者性」に関するものであって、これは意図や期待に関しては「理由の他者性」として現れる種類の他者性なのである。

　感覚の他者性をめぐる話題のうちで最も興味深いのは「ロボットの疑惑」に関するものである。誰も他人に起こる心的現象を経験したことはないのだから、他人と人間そっくりに出来たロボットの間には区別が成り立たないことになる。[F]感覚の他者性を前提する限り、他人の痛みとはすなわち

他人の痛みの振る舞いのことでしかありえず、そうである以上、定義上その他人と同じように振る舞うロボットは、他人と同じ意味で「痛みを感じている」ことになる。逆にもし、ロボットが痛みを感じるはずはない、というのであれば、他人もまた痛みを感じるはずはない、というわけである。ということはつまり、(人間であると信じていた)古くからの友人の一人が、精巧に出来たロボットであることがわかったとしても、あるいは精巧に出来たロボットになったとしても、そこには何の違いも認められない、ということである。これは奇妙なことではないだろうか。

(永井均『〈私〉の存在の比類なさ』による。ただし、問題の作成の上から、本文の一部を改めた。)

(注) デカルト……フランスの哲学者(一五九六〜一六五〇年)

問1　傍線部Ａ「等質空間の捏造」を分かりやすく説明せよ。

問2　傍線部Ｂ「今度のわからなさは最初のそれとは異質である」とあるが、両者のわからなさはどういう意味で異質なのか、説明せよ。

問3　傍線部Ｃ「したがって、すべての人間があらゆる点で同一の規範に従うとすれば、この意味での他者は存在しないことになる」とあるが、なぜ、そう言えるのか、説明せよ。

問4　傍線部Ｄ「それゆえ、「理由の他者性」はここでは問題になりえない」とあるが、なぜ、そう言えるのか。「理由の他者性」の意味に基づいて説明せよ。

問5　傍線部Ｅ「そうではない」とあるが、具体的にはどういうことか。本文中の語句を使って説明せよ。

問6　傍線部Ｆ「感覚の他者性を前提する限り、他人の痛みとはすなわち他人の痛みの振る舞いのことでしかありえず」とあるが、なぜ、そう言えるのか、分かりやすく説明せよ。

問1

問2

問3

問4

問5

問6

第四講　解答

問1

自己とは本質的に同等なるものを持ち得ない唯一の存在であるのに、近代は一切の唯一性を否定し、すべてを同等なるものの複数性において語ろうとするということ。

問2

「何を考えているのかわからない」という時のわからなさは質問をしてみることによってわかるのに対し、「なぜ考えているのかわからない」という時のわからなさは他者の固有の規範に基づいているため質問をしてもわからないという意味で異質である。

問3

他者とは異なる規範に従う者のことであるが、すべての人間があらゆる点で同一の規範に従うとすれば、他者が存在することの要件が否定されることになるから。

問4

「理由の他者性」とは他者の行為についてその理由が異なる規範に従っているためわからないというものであるが、今問題になっているのは他者の行為ではなく出来事の原因であるから。

問5

「感覚の他者性」はすべての心理現象について妥当する問題のように思えるが、そうではなく、感覚しているときに体験していることは感覚の本質をなすのに対し、思考や意図や期待をしているときに体験していることは、思考や意図や期待の本質とは無関係であるということ。

問6

「感覚の他者性」とは他人の痛みなどの感覚を感じることは体験できないため誰もわからず、自分が痛みを感覚しているときと同様の振る舞いを他人がしているということでしか他人の痛みを認識できないから。